

## 出生前検査／中絶手術と産婦人科医療のいま -産婦人科医へのインタビュー調査から-

企画者：菅野摂子（埼玉大学）

話題提供者：柘植あづみ（明治学院大学）・齋藤圭介（岡山大学）・佐野敦子（東京大学）・  
二階堂祐子（国立民族学博物館）・石黒眞里（明治学院大学）・菅野摂子（埼玉大学）

### 企画趣旨(目的)

出生前検査として2013年に始まったNIPTは産婦人科以外の医師が参入し、増加するとともにその後の精密検査及び中絶手術へのアクセスが課題となっている。障がいや理由とした中絶をめぐる法整備や妊婦の苦悩が報道されることはあっても、医療者がいかなる思いでこの問題を引き受けているのか／引き受けていないのかは明らかにされていない。本RTDでは、産婦人科医へのインタビュー調査をもとに医療としての中絶の抱える問題を議論する。

### 話題提供

今回発表するメンバーは、2021年3月より産婦人科医に対する調査を行ってきた。2022年6月時点で、対象者は12名、年齢は30歳～71歳、男性5名女性7名である。これまでの経歴、出生前検査および中絶の経験とそれに対する考え方、さらには日本の産科医療全般への思いなどを中心に半構造化インタビューにて尋ねた。この調査データをもとに、本RTDでは各人が次のテーマで問題提起を行い、フロアに議論を開いていく。まず、「産婦人科医のキャリアと患者への対応」（石黒眞里）では、産婦人科医を志した理由や医師としてのキャリアが出生前検査に対する考え方や患者への対応といかに関係しているか調査結果から示す。続いて、「産婦人科医の中絶観」（柘植あづみ）では、日本の「配偶者の同意」への批判や中絶技術の革新の遅れが指摘される一方、アメリカでは中絶の規制が厳しくなる世界情勢を鑑み、日本の中絶を担う医師の中絶への認識を検討する。海外と比較した日本の状況について、「ドイツの妊娠中絶法制改正から考える妊婦の自己決定を支える相談事業の在り方」（佐野敦子）では、ドイツの中絶法制の現状の議論と出生前診断に関わる相談事業をとりあげ、日本の妊婦（や家族計画）に関わる相談事業の問題を提起する。「アイルランドの妊娠中絶法立法化の議論から考える胎児条項の書き込みに対する医師の考え」（二階堂祐子）では、日本の産婦人科医が胎児「異常」を理由とした人工妊娠中絶をどのような医療実践と捉えているのか、アイルランドでの議論を参照しながら検討を行う。国内に視点を戻し、胎児の「異常」による中絶が中期になることを踏まえて中期中絶への医師の認識を検討する「中期中絶のありようと医師の視覚」（菅野摂子）、妊婦の夫に着目し、産婦人科医の男性の語り方のマッピングをとおして医療としての中絶が抱える問題を考える「選択的中絶と男性」（齋藤圭介）では、中絶をめぐる多様な問題を提起する。

本研究は、科研費（基盤研究B）20H04449によるものである。